孝明天皇暗殺　考

鹿島氏は、孝明天皇逝去に対して次のような見解を述べている。

「１８６６年１２月２５日孝明天皇暗殺はまぎれもない事実であり、北朝という一つの王朝の消滅であった」。

「孝明天皇弑殺は１２月２４日深夜というが本当は２５日の早朝であった。暗殺の立会人となる人物は中山と岩倉の関係者となる。将軍家茂が慶喜と慶永によって毒殺されたあと、孝明天皇は妾の堀川紀子の屋敷の便所で、床下にかくれていた長州の下忍伊藤博聞の忍者刀によって高貴なるお尻をえぐって殺され、その子の睦仁は御所に潜入した長州忍者の猿廻の猿によって手を傷つけられ、岩倉が買収した医者がその手に毒を塗って暗殺した。今やこのことを知る国民は一人もいない］（堀川紀子は岩倉具視の妹である）。

「南朝滅亡ののちに長州に潜んで南朝の光良親王の子孫と稱する大室 寅之佑が西郷に伴われて薩摩邸に入り、岩倉と中山忠能の助けを 借りて睦仁とすり代わってついに南朝の天皇家が復活した」。

「中山や岩倉は天皇の遺体を洗い清めて食中毒という事にして睦仁に見せたから、睦仁も一応は納得して慶応３年１月９日に踐祚せんそした。先帝には同年２月１６日、正式に孝明天皇の謚（おくりな）が贈られたが、睦仁は宮中の慣習によって女装して女言葉を話すなど、１６歳にしては体格も悪くて華奢な少年で、かって岩倉のオチゴさんであった孝明 の血統を引く天皇であった」。

孝明天皇暗殺の背景事情について次のように記述している。

基本的に「佐幕攘夷」（親徳川＝公武合体派）　先帝・孝明天皇の政策「攘夷」を継承。この場合、「神風」でも吹かない限り、「攘夷」の実行は不可能。（英・仏と言った欧米列強とまともに戦った所で、日本が負ける事は端から分かり切っている。つまり、天皇＝現人神（あらひとがみ）が不可能な事を命令した事になり、開国倒幕派（薩長）にしてみれば、天皇をすり替える必要に迫られた。

次のように記述している。

明治４２年には伊藤博文が暗殺されたが、その翌年には南北朝いずれが正系かという史論が生じたときに、明治天皇は自ら乗り出して南朝正系論を正しいとした。しからば、孝明天皇までの北朝は偽朝であったということになる。(p.21)

昭和４年２月に、かつて宮内大臣として権勢を振った田中光顕が、「実は明治天皇は孝明天皇の子ではない。後醍醐天皇の第１１番目の皇子ミツナガ親王の子孫で、長州萩で毛利氏が守護してきた。薩長連合には、この南朝の末孫を天皇にするといとう密約があった」と述べている。

「明治天皇すりかえ」余波

明治２０年、柳原愛子（やなぎわら なるこ）が、立派な駕籠に乗り、お供を数百人も引連れ美々 し く行列を組んで「地家作蔵」の実家がある田布施に入り、位牌を持ち去っている。愛子は大室庄吉を呼び出して石城山へ登る道案内をさせた。

これが、事実であるとすれば、これは、地家作蔵が、大室（地家）寅之祐＝明治天皇の実の父親である、ことを承知して居た人々による行動である、ことを証明するのではないか。

この帰り道で、女官の一人が大室天皇の秘密をつげぐちして漏らした事に愛子が激怒。刀で某女官を斬り殺した、と伝えられている。京都の 興正寺に立ち寄り、スへの位牌も柳原愛子が東京に持ち帰ったが戦災で焼 失。こちらは位牌は無いが過去帳に記載有り。

【京都明治天皇と東京明治天皇の比較表】

京都明治天皇と東京明治天皇の比較表が作成されている。これをれんだいこ風に整理し直す。

項目	即位前（睦仁親王時代）	即位後（明治天皇時代）
写真	どちらも僅かで、京都明治天皇の場合には即位の際の写真が１枚のみ現存する。東京明治天皇も写真を撮られる事を好まず、キヨソーネに描かせた「肖像画」を写真に撮らせて「御真影」とした。	
顔面「あばた」	無し。幼少の折に種痘を受け、疱瘡（天然痘）には罹っておらず、顔面に「あばた」は無かった。	有り。あばたを隠す為に、髭（ひげ）を生やされた。
	大室寅之祐は、２歳の時、痘瘡（天然痘）に罹り、その結果、口の周りに「あばた」が残っていた。明治天皇を大室寅之祐と考えれば符合する。	
体型	細身。	体重24貫(約９０Kg)の巨漢。
気性、性格	ひ弱。幼少より「虚弱体質」で、御所の女官達の中での温室育ちで、元治元年(1864)年7月の「禁門の変」の際には、砲声と女官達の悲鳴に驚き「失神」した（当時13才）。	威風堂々。体格と恰幅が良かった。
運動能力	不得手。１６才になっても、宮中で女官と一緒を「遊戯」を好んだ。即位前の睦仁親王に、「乗馬」の記録は残っていない。つまり、馬には乗れなかったと推測される。	得手。側近の者と相撲をとって相手を投げ飛ばしたと云う。鳥羽伏見の戦の際、馬上豊かに関兵した。維新後も、馬上から近衛兵を関兵し、自ら大声で号令した。
利き腕	右利き。躾（しつけ）が厳しく、左利きになる訳が無かった。	左利き。左利きになったのは、
	大室寅之祐は、左利きであった。となった。又、維新後の天皇は良い言葉で言えばであった。	
筆裁き	下手。１６才になっても「金釘流」つまり「下手」であった。	達筆。
学問	?	熱心。教養豊かであった。
異性関係	?	艶福家。
政務	?	熱心。
政策	先帝・孝明天皇の政策を継承し、「佐幕攘夷」の公武合体路線を敷いた。	先帝・孝明天皇の政策を転換し、倒幕路線を敷いた。
政治能力	京都明治天皇の生母・中山慶子自身が、父である忠能に宛てた手紙が残っている。 「何分にも世は末に及び、御所中悪魔えいまんにて恐れ入り候。当今様おん人事（睦仁天皇）じつにお案じ申し上げ、悲観のほかこれなく候。とかく格別明君にあらせられず候わでは内外とても治まり申さず・・・かかるご時節に当今様の御代にならせられ候おんことなんと申し上げておんよろしく候や。ただただ神慮にかなわせられ、ご強運強く、神明のご加護にて早々内外の悪魔を遠ざけられ候よう、祈り入り祈り入り上げ候。なかなか紙上に尽くしがたき事ども日々御座候いて、浅間しきごようす、嘆き入り、嘆き入り参らせ候」。 これによれば、孝明天皇ほどの明君ではないことを心配している様子が分かる。東京明治天皇の旺盛な事績は衆知の通りであるので割愛するが、明らかに差が見て取れよう。	

昭憲皇太后

嘉永2年4月17日（1849年5月9日）- 1914年（大正3年）4月9日）は、明治天皇の皇后。旧名・一条美子（いちじょう はるこ）。お印は若葉（わかば）。病弱で実子はなかったが、嫡妻として、夫・明治天皇の側室が生んだ嘉仁親王（大正天皇）を養子とした。

嘉永２年（1849 年）4 月 17 日誕生。従一位左大臣・一条忠香の三女で、生母は側室・新畑民子（忠香の

正室は伏見宮順子女王）。右大臣・一条実良（1835－1868 年）の妹。

維新期の皇后として社会事業振興の先頭に立ち、華族女学校（現学習院女子高等科）や、お茶の水の東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）の設立、日本赤十字社の発展などに大きく寄与した（赤十字社の正式紋章「赤十字桐竹鳳凰章」は、紋章制定の相談を受けた際、皇后がたまたま被っていた冠が桐と竹の組み合わせで出来ていた事から、「これがよかろう」という事で決められたという）。

1912 年（明治 45 年）、アメリカ合衆国の首都ワシントン D.C. にて第 9 回赤十字国際会議が開催された際、国際赤十字に対して皇后が 10 万円（現在の貨幣価値に換算すれば約 3 億 5,000 万円とも云われる）を下賜した。赤十字国際委員会はこの御下賜金を基にして昭憲皇太后基金 (Shōken Fund) を創設した。この基金は現在も運用されており、皇后の命日に利子を配分している。津田梅子ら女子留学生の派遣にも大きく関わったとされる。皇后として欧化政策の先頭に立たなければならない立場を強く自覚し、1886 年（明治 19 年）以降は、着用の衣服を寝間着を除いてすべて洋服に切り替えた。洋服を率先着用した理由としてもう一つ「上半身と下半身の分かれていない着物は女子の行動を制限して不自由である」という皇后自身の言葉も伝えられている。現在の皇室で和服が着られないのは、この時の方針が踏襲されているため。

明治天皇の「皇后」（配偶者）であった一条美子（はるこ）皇后が何故、「昭憲皇后」では無く、本来「天皇の母」（又は先帝の皇后）を意味する「皇太后」――「昭憲皇太后」の追号を贈られたのか？　この辺りの事情について、明治神宮公式サイト内の『なぜ昭憲皇后ではなく、昭憲皇太后なのですか？』（URL：http://www.meijijingu.or.jp/intro/qa/31.htm）を以下に転載引用させて頂きます。

明治天皇さまのお后（きさき）さまなら「皇太后」でなく「皇后」とお呼びするのが正しいのではないかという考え方もございますが、実はこのいきさつについてはたいへん難しい問題があります。

昭憲さまは嘉永（かえい）3 年（1850）4 月 17 日（新暦 5 月 28 日）一条忠香（ただか）の三女として御誕生あそばされました。はじめ勝子（まさこ）、富貴君（ふきぎみ）、寿栄君（すえぎみ）などと呼ばれ、入内（じゅだい）※1 後、美子（はるこ）と称されました。明治元年 12 月 28 日御入内まもなく皇后の宣下（せんげ）※2 があり明治天皇さまのお后となられました。大正 3 年 4 月 11 日に崩御※3 されています。同年 5 月 9 日に宮内省告示第九号により「昭憲皇太后」のご追号が仰せ出されたのでした。そして大正 4 年 5 月 1 日には明治神宮の御祭神として内務省告示第三十号により祭神「明治天皇・昭憲皇太后」の祭神名が発表されたのです。

ところがこの御祭神名について有識者の中から疑問の声が出てきたのです。

理由は

両陛下を相並んでお呼びする場合、「天皇皇后両陛下」と称するのであって「天皇皇太后両陛下」とは称さないこと。

「皇太后」は天皇の母親の意味であること。

よって明治神宮の御祭神は御夫婦であられるから「明治天皇・昭憲皇后」が正しい。

亡くなった方にはご生前の時の最高の位でお呼びすることが常例。「皇太后」の称号は「皇后」より下の位になる。だから昭憲さまは生前「皇后」でしたので、「昭憲皇后」と称するのが正しいことになる。

では、なぜこのような称号をつけてしまったのでしょうか。昭憲さまが崩御されたのは大正 3 年です。すでに明治天皇は崩御され（明治 45 年 7 月 30 日）、大正天皇が践祚（せんそ）※4 されたので皇太后となられたのでした。崩御された時はすでに皇太后であらせらたのですが、当時の宮内大臣が昭憲さまのご追号を皇后に改めないで、「昭憲皇太后」としてそのまま大正天皇に上奏し御裁可※5 下となったのです。はじめにこの上奏の時点で間違いが生じました。そしてそのまま御祭神名も「昭憲皇太后」としてしまったのです。

このような経緯から明治神宮の御祭神名としてそぐわぬことから「昭憲皇太后」を「昭憲皇后」と改めるよう、御鎮座寸前の大正 9 年 8 月 9 日（明治神宮の御鎮座は大正 9 年 11 月 1 日）明治神宮奉賛会会長徳川家達（いえさと）より宮内大臣宛へ建議が出されました。

しかし諸事の理由から御祭神名を改めることは出来ませんでした。その理由として

天皇より御裁可されたものはたとえ間違っていても変えられない。

すでに御神体に御祭神名がしるされていて、御鎮座の日までに新しく造り直すことが無理。

の二点があげられています。

時代が下って昭和 38 年 12 月 10 日、明年（昭和 39 年）の昭憲皇太后 50 年祭にあたり宮内庁へ「昭憲皇太后御追号御改定に関する懇願」が神宮より、また崇敬会会長高橋龍太郎より「昭憲皇太后御追号御改定につき御願」が提出され、続いて昭和 42 年 12 月 26 日に明年（昭和 43 年）明治維新百年にあたり再度「御祭神の御称号訂正につき懇願」、崇敬会会長足立正より「御祭神の御称号訂正につき再度の御願」が提出されました。しかし宮内庁の回答は改めないとのご返事だったそうです。

御鎮座当時首相であった原敬は「他日、何かの機会及び形式において昭憲皇太后を神功皇后※6 檀林皇后※7 などの前例によって、一般には昭憲皇后と称し奉りても違法ではないことの趣旨を明らかにしておくことが必要であろう。」と言っています。（『原敬日記』大正 9 年 10 月 13 日）

明治天皇替え玉説の無惨

http://members3.jcom.home.ne.jp/shishoukaku/05shushinkai/004special/130601fate/130601meiji-tenno.html

木村禎之助の懐旧談

明治帝と補佐した大人物たちの鴻業こうぎょうを不当に貶めている。『裏切られたの３人の天皇』、『明治維新の生贄』という ２冊の本が巷間こうかんに出廻っている。これらの本は、明治天皇が孝明天皇の本当の皇子ではなく、幕末に現山口県田布施町麻郷に住んでいて「南朝子孫」を主張してきたという大室家の子供で、寅之佑という者とすり替えられた本人であり、このすり替え劇の当事者は伊藤俊輔、後の博文だという、２冊総８９９頁にわたり綿々と述べたものである。

明治天皇の幼時のお姿は幾人かの側近者によって記録されている。祐宮 (さちのみや）は当時権大納言であった中山忠能の娘で更衣（後に位を上げて権典侍）という低い位の女官が、たまたま帝の御意を得て生んだ子であるから、孝明帝から認知されはしたが摂関家出の皇后、中宮の所生でなく、皇子出生の期待されていない女官が作った子、言ってみれば私生児扱いで、そのために宮中では疎んぜられていたのかもしれない。そこで小さな粗末な中山家で５歳までの幼時を過された。

祐宮の同胞はすべて夭折している。したがって他に男子の出生が無いことがはっきりしないと御所に入れることは難しかったのだろう。宮中記録には御母英昭皇太后夙子、実権典侍藤原慶子（中山大納言忠能女）となっている。だから皇太子宣下はずっと後になったのではないだろうか。このような事情があって祐宮のご生誕は生母である中山慶子の生家中山忠能の屋敷。５歳なられるまでそこでお育ちになっている。

天皇は幼いころから勝ち気の負けず嫌いで、ときにご自分の思うようにならぬことがあると、ずいぶん激しいこともなさったらしい。そのころ漢学者木村某の妻らい女が乳母になって、その一才下の子禎之助と一緒に中山家で育てられた。二人でやんちゃ、乱暴を毎日。らい女のことを「らい公」、禎之助のことを「禎ぼん」と呼ばれていた。

一番お気に召したのは木馬の遊び。祖父の中山も馬にして遊んだ。体格の立派な気の強いやんちゃ坊主であるが頭は非常によい。人をよく殴った。らい女は安政６年７月宮８歳のときご用済となる。皇太子にこんな自由が許されるものではあるまい。なお皇后や女御からの男子出生が期待されていたので中山家で自由に育たれただろう。記録によると当歳までの祐宮は丈夫ではなかった。しかしそれ以後はどんどん逞しく成長された。宮と一緒に育った乳母の子木村禎之助は後年次のように述懐している。

「勝気であられるだけに非常にご性急で、すこしお気に入らぬことがあると、すぐゲンコをかためて誰でもかまわず打たれた。一つ年下でいたずらざかりのわたくしは、お気にさわってどのくらいゲンコをちょうだいしたかわからない。

いまでも忘れられないのは、天皇が大事にかわいがっておられた金魚鉢の金魚を、お留守のあいだに一尾つかみころしたときで、間もなくおかえりになって見つけられ、ポカン、ポカンとずいぶんうたれたことです。

こんなときにはお怒りがはげしくて、母はご機嫌をとりなおすのにいろいろ苦心した。ひどくお怒りのときには、二日も三日もご機嫌がなおらなかった。・・・」

薮嘉根子（旧女官）が「兄実体から聞いた」といって、話したこと。

「天皇は大変勝気で、稚児（お遊び相手）をお相手にいくさごっこをなさるときには、ご自分が先に立って木太刀をもって切り合いをされ、決して負けられるようなことはなかった。

したがっておいたもなかなかはげしく、そこへ兄の亀丸がお相手になり、ずいぶん女官方を困らせたそうで、あるときなど、女官のうしろから水鉄砲で水をかけておどろかせたり、お呉服所の方たちがせっかくたのしみにして大切にお縁側にならべておいた万年青の葉を、はさみで一枚一枚チョン切って丸坊主にしてしまったり、お廊下はいつもおいたで大騒ぎ、あまりそれがすぎると、一位局（生母慶子）さまがきつくたしなめられる。それでもおやめにな ぬときには、お文庫（倉のこと）の中へお入れになる云々」

当時別の女官の懐旧談に次のようにある。

「らいさんの息子の禎ぼんもなかかの暴れん坊で、皇子といっしょになってずいぶんあらいことをしているのを、たびたび見受けました。

あるとき、皇子のお相手しながら廊下を通っていた禎ぼんが急に立ち止まって、お庭へ向けて小用をしながら、『すこし待っていて下さい』と申しますと、皇子は『ウムよしよし』とすむまでお待ち になっていました。かようにご活発のお気質でありましたから、大宮御所内の親王御殿内にお移りになって後も、お障子には破れ穴があき、幾度お張り替えになっても何時も穴の無いお障子はないくらいでありました」